資料３－３

平成28年9月30日（金）10:00～12:00
第28回ナショナル・レジリエンス（防災・減災）懇談会

困難をかかえた被災者支援とインクルーシブ社会
ー熊本地震における熊本学園大学避難所の取り組みー

熊本学園大学社会福祉学部教授
花田昌宣

発表概要

- 発災後の避難所は地域の縮図であり多様な人たちが避難してくる。熊本学園大学は指定避難所ではなかったが、4月14日の発災直後から校舎を開放して避難所を開設した。16日の本震後、避難してきた地域の人々750名、そのうち障害者を60名あまり受入れ、5月9日授業再開後も継続し、5月28日に閉所するまで、24時間支援体制を構築した。最後の住民の行き先が決まった時点で閉所。最後に残っていたのは、障害者、高齢者、生活困窮者たち20名弱。
- 地域の災害弱者といわれる人々を受け入れ・実践したことは、地域住民ばかりではなくメディアや災害関係者から、高く評価された。その経験と教訓、将来への課題を提起する。

（1）乏しかった事前の備え

機能しなかったもの

大規模火災のための避難訓練

台風・水害等への対応：危機管理室

広域避難場所としてのグラウンド

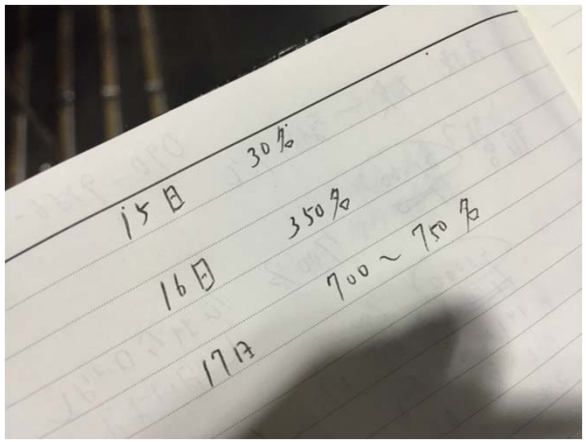
つまるところ

大規模地震への対応は何らできていなかった。

（地震のための防災マニュアルの不備）

（2）発災時・発災後の対応

＜大学としての緊急対応＞
4月14日午後9時26分　グラウンドの開放、14号館への誘導
　　自主的避難所の始まり
4月15日：建物の点検および学生教職員の安否確認の開始。
4月16日午前1時24分　本震発生。理事長・学長が直ちに大学に駆けつけるとともに、総務課を中心とした職員が大学に出勤。
午前10時：災害対策本部（理事長、学長、事務局長、総務課長等で構成）を緊急に設置 ：建造物の安全確認および教職員の安否確認
　　14号館を避難所として教員有志で運営することとした。



避難所の開設と課題：地域の様々な人々を受入れる：避難所は地域の縮図

熊本学園大学は、広域避難所：大江グラウンド、体育館
避難所に障害者の存在が見えない：東北の経験

4月14日深夜

4月16日午前

熊本学園大学の避難所

避難所運営
様々な避難者たちへのケア

◇ 多様なニーズがある。

◇ 社会階層も様々。貧富の格差も明瞭に見えてくる。（市営住宅入居者、保護受給者から、所得の高い人々や公務員、医師まで）

◇ 必要とされるもの・ことは多様である。

地域に様々な人たちがいて、その人たちが避難してくること：地域の中で暮らす障害者が避難してきた

◇　排除、隔離しないという当たり前の原則

◇　障害者であれ「要配慮者」「要援護者」であれ、地震が起きる前までは地域に暮らしていた人たちで、施設入所者ではないこと。

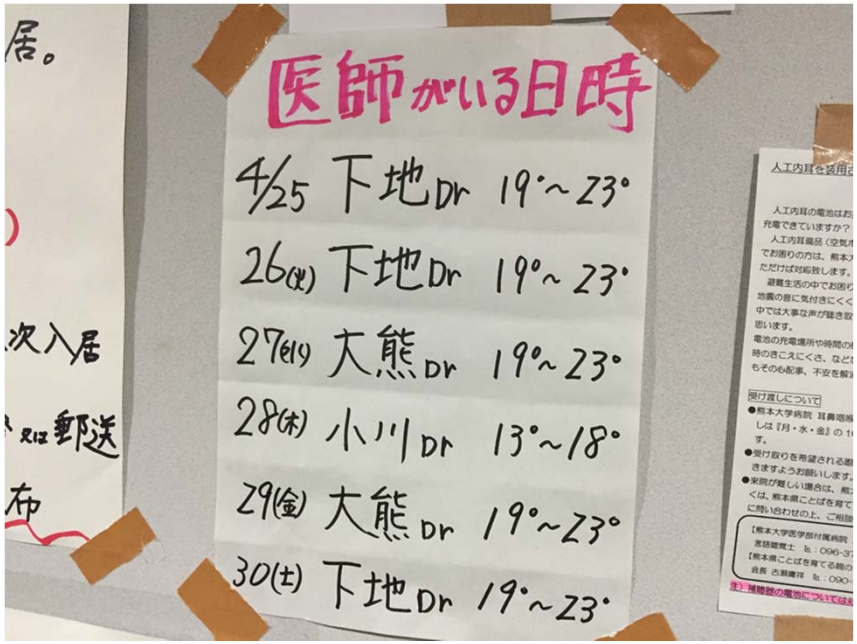
◇　だから、障害者・高齢者を「福祉避難所」へ、という考え方をとらない

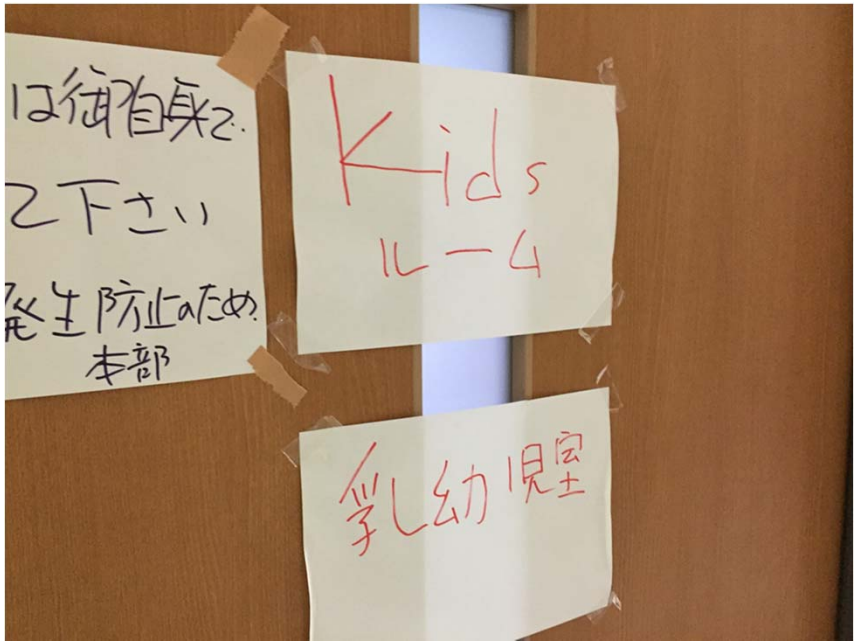
障害者らの受入れ:障害者スペースの確保

「福祉避難所」ではなく
<u>障害者に対する合理的配慮</u>としての
ホールの開放と支援体制

生活環境の確保と体制づくり

健康保持、衛生環境保持は最低限、母子への対応
水・食料の確保
絶えず人がいる：運営者、専門職、学生（全てボランティア）
「管理」はしないが「配慮」する
閉所（5月28日）まで、24時間態勢の維持





支える体制：

◇ 経験ある教員がいた：職務命令はなく有志
阪神淡路大震災経験者（3名）
東日本大震災を調査研究している研究者（2,3名）
障害のある教員（元内閣府障害者制度改革推進室室長）
社会福祉学部スタッフ

◇学生ボランティア：近隣在住で避難してきていた学生

◇ 医師、看護師、介護職：水俣学研究センターの教員研究者、卒業生の専門職従事者

◇ 全国からの支援：
障害者団体関係、専門職団体

☞巡回型の様々な専門職組織による応援は、???

避難所収束と個別的配慮：
縮小段階での個別対応

原則：必要とする人がいる限り運営者（大学）の都合で避難所は閉じない。

避難所から、自宅、新たな住居など次のステップに行くことを支援。4月末から、段階的縮小と個別ヒアリング

一般的ニーズ調査ではなく、我々ができるメニューを準備した上で話を聞くという姿勢☞すぐに対応できること

片付けボランティア、福祉サービス事業者と連携、住居探し…

(3)官民連携、地域貢献など

◇　避難所には行政職員が常駐していた:災害対応に慣れた職員ではないことから物資の調達をお願いした。
◇　災害支援組織への対応の煩雑さ
◇　個別対応段階での連携
　生活保護課、地域包括支援センター
◇　様々なボランティアを受け入れる:コーディネート力

今後に生かすべき教訓（良く機能した点、課題等）

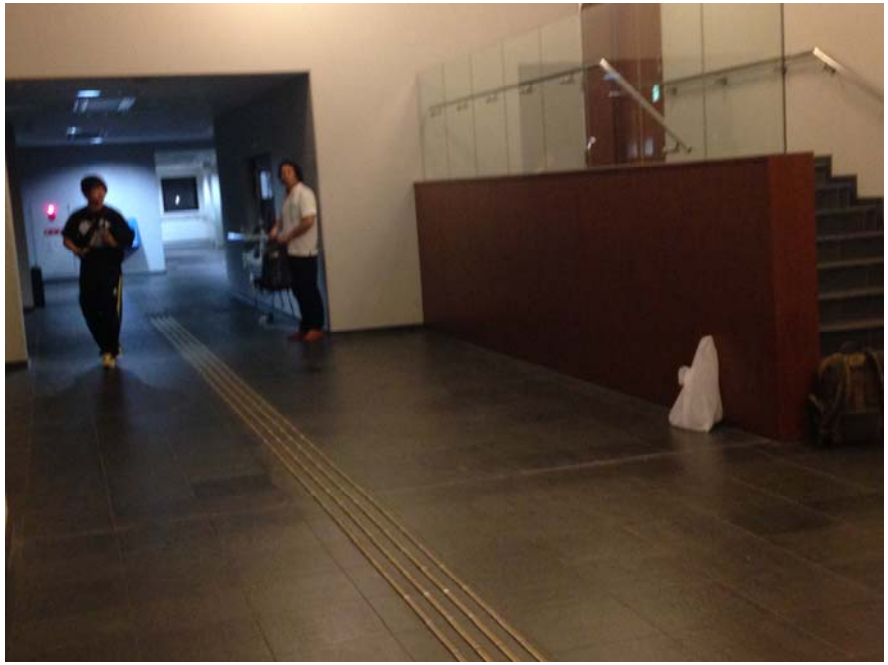
最後に：私たちは当たり前のことをしていたつもり、なぜ他の避難所ではできなかったのか。教室を一つ開放すれば障害者スペースはできたはず。

◇　震災前のあり方が問われる

バリアフリーの大学：トイレ、スロープ、教職員の意識
障害学生が多数いる：日常風景の中の障害学生
地域の障害者・高齢者との日常的交流

◇　地域に共生社会を根付かせよう

学校・公共施設に障害者などが見えなければ、配慮がされない

◇　緊急時の柔軟な組織運営：手続きとマニュアル思考では動かない

ご静聴ありがとうございました
避難所の閉鎖　５月２８日